

立山参道三十三観音巡り

33 のお寺、小さなお堂や道沿いの仏像から成る立山参道観音巡りは、江戸時代（1603 年～1867 年）に立山に登った信者が通った道をたどる、現在の立山町を横断する精神的で風光明媚な旅である。全国の巡礼者たちは、罪から身を清め、あの世に行けると信じられていた象徴的な生まれ変わりを達成するために、霊峰を目指した。

人里離れた立山への遠征は時間のかかる努力であり、巡礼者たちは休息と補給のため、しばしば途中で休憩をとった。休憩の間、彼らはしばしば地元の礼拝所で祈りを捧げ、時には観音菩薩を含む神々の像などの宗教的な品々を残したり奉納したりした。やがてこれらの観音像は、関西でよく知られている西国三十三所観音巡礼のミニチュア版ともいえる二次巡礼路を構成するようになった。これにより、立山に向かう巡礼者たちは、一度の旅で 2 つの修行を行うことができ、33 体の観音石像は、立山への道を示す目印にもなった。

立山参道観音巡りの 42 キロのコースは、富山平野の端にある岩峯寺の集落にある尾山神社前立社壇を出発し、常願寺川に沿って立山駅まで坂道を登る。そこから立山黒部アルペンルートを通り、立山を目指す登山者のベースとなる標高 2,400 メートル以上の室堂平へと登っていく。途中、低地から山岳地帯へと景色が一変する。岩峯寺と立山駅との間は、駅でレンタルできる電動アシスト付きマウンテンバイク（E-bike）が便利だが、アルペンルート内は徒歩のみ。